

別れの篠笛

秋がすぎ、初冬の寒気が島をしめつける季節となった。

時の流れというべきだろうか、かつての戦場を体験した世代は随分と減ってしまった。

この歳になると(九十歳)、友人や同年の知名人の訃報を多く聞くが、全く寂しいものである。多くの親しい人を喪った私は、人生は孤独だという想いを強く感じる。

朝日の天声人語欄に、日本人の平均寿命は、女性が八十六歳を超え、男性も八十歳に迫るとあった。だがその半数がその歳月を使い切らず生涯を終えるとあった。

何でもない別れと思っていたものが、永遠の別れとなってしまった場合もある。

去って行く者が自動車、汽車、あるいは飛行機だと、どこかあつさりしたものがあつた。だが船が出て行く時は実にゆつくりと港を離れて行く。

少し沖に出た船は、ゆるやかに向きを変える。急いで客室を通り抜け、反対側に走る。親や身内、友らが懸命に手を振っている。ポーツと汽笛を鳴らして船は速度を上げる。

こらえていた涙がぼろぼろこぼれる。

今でこそ、陸路で行けるが、当時の船での出発は「今生の別れ」を思わせるほど切なかつたものである。かつての島の少年少女達の試練は、棧橋より始まったのである。

二度と棧橋を踏むこともなかつた若者もいた。

別れといえば、忘れることのできない思い出がある。

昭和十九年十月十五日、輸送船(鴨緑丸)で基隆港を出発直前の早暁、突如、米海軍機動部隊の空襲を受け、瞬時に十八名の戦死者が出た。

若くして散つた仲間の無念さを思い私らは泣いた。

多くの人々の恩恵を受けながら生きて来た私、恩を受けたら必ず返す、という父の言葉を忘れてはいないのだが……

さして遠くない日に私は死ぬことは確実である。この歳になるまで長生きをしていると困ることもある。私が高界した時、葬儀の際にちゃんと挨拶をして呉れるであろうと思う人が、私より先にあの世へ旅立つて行くのである。

「あなたのあの世の席は、ちゃんと取って置いてやるからな」

そう言って死んで行った友もいた。まさか地獄の席ではないだろうな、と一寸気になった。

かつての生死を共にした仲間も、今はもうこの世にいない。

いま頼りにしているのは、歴史ある寺の大僧正であるS師である。

ところが最近少し体調が悪く、心配している。

責任感の強い師であるから、やって来られるとは思うが。

いろいろ考えたが、三男の篠笛を聴きながら、“三途の川”（死者が冥土に行く途中、死出の山を越えてから渡る川、善人は橋を、軽い罪人は浅瀬を、悪人は深い所を渡るといふ）があれば渡って行きたいと思うようになった。それができたら私にとってこれ以上の喜びはない。

三男にとっては、悲しみの中の演奏である。辛いだろがやってもらいたいのである。

多忙の中を私の葬儀に参列の方々、音楽をやっていた私の上の兄が、涙してほめた三男の篠笛です。

どうか私と一緒に聴いて下さい。